

TOPICS 今号のトピックス

■番組上映会&公開セミナー

「今、福島から伝えること～3.11大震災・福島原発事故を忘れない!～」

■公開セミナー 第37回名作の舞台裏「ミエルヒ」

■カンヌライオンズ入賞作品上映会&2014春の人気番組展ほか

■定時評議会で平成26・27年度理事及び25年度事業報告、決算を承認

■番組上映会&公開セミナー

「今、福島から伝えること～3.11大震災・福島原発事故を忘れない!～」

■複合的な大災害の「福島」をテーマに開催

当センターでは、2011年9月以降、東日本大震災をテーマに、番組上映会と公開セミナーを継続的に開催している。4回目の今回は、大震災と福島原発事故の複合的な大災害を受けた「福島」をテーマに開催した。番組上映会は、3月11日から30日まで放送ライブラリー施設内で、福島の民放4社の震災関連番組、NHKの福島原発事故の検証番組、放射能汚染問題に迫った民放番組など合計6本を連日上映した。期間中延べ779人が参加し、参加者からは「原発事故の影響の大きさに心が痛む。自然の美しさと農民の苦労に驚かされ、現実を知ることが大切だと思った」「復興の希望、苦悩、メルトダウンの原因の科学的な追求など、どれも見ごたえのある作品だった」などの感想が寄せられた。

上映番組は、『NNNドキュメント13大震災シリーズ 今、伝えたいこと(仮)福島女子高生の叫び』福島中央テレビ、『農業をあきらめない～旧警戒区域の農家たち～』福島放送、『キ・ボウ～全村避難 福島県飯館村二年の記録』福島テレビ、『それでも希望のタネをまく～福島農家2年めの試練～』テレビユー福島、『NHKスペシャル メルトダウン File3 原子炉“冷却”の死角』NHK、『放射線を浴びたX年後』南海放送。

■公開セミナー 制作者に聞く!を東京で開催



公開セミナーは、3月22日、都内の千代田放送会館ホールで行われ、午前中は登壇者の制作番組を上映、午後2時30分から原発事故が福島の農家に与えた被害の現状、原発のメルトダウンの検証、現在の福島の様子などをテーマにトークが展開された。登壇者は、NHK大型企画開発センターの中村直文さん、テレビユー福島制作部の深谷茂美さん、福島テレビ制作部の鈴木知加子さん、司会は放送作家の石井彰さん。

■福島、そして原発事故後に何が起きているのか

福島テレビの鈴木さんが制作した『キ・ボウ～全村避難』



は、避難区域の飯館村の先の見えない不安に揺れ動く村民と村長を追った作品で、13年の日本民間放送連盟テレビ教養番組最優秀を受賞した。この飯館村は、米作りに加え、安定した農業を目指し、トルコキキ

ョウやサヤエンドウ作り、ブランド牛を育てる酪農を始め、村を元気にしてきた。若い農家のお嫁さんたちをヨーロッパに派遣した“若妻の翼”事業では、海外の農家を参考に、自家焙煎のコーヒーの店を作ったりして、県外からもお客さんが来るようになり、心豊かな素敵な村になったという。司会の石井さんから番組制作では何を考え、ねらいは何だったのかとの質問に、鈴木さんは、「原発事故で素敵な村が築いてきたものも一瞬にして奪われてしまった。村のことを知って頂くことが原発事故を知ってもらうことだと思った。村の人々の姿が、どこかで自分に重ね合わせることも必要なのではないか、そんな思いで番組を制作した」と語った。

続いて、テレビユー福島の深谷さんが制作した『それでも希望のタネをまく～』は、農地が放射線物質で汚染された福島農家の姿を追い、第28回農業ジャーナリスト賞を受賞している。番組の主人公は、以前から行き来のある農家の方で、震災で、さぞ参っているのではと訪ねたところ「田んぼを耕すと線量が下がるので、この取り組みをやっている。大学の研究者もやることに意味がある」と言ってくれたという。当時、福島の農業は、葉物野菜から暫定基準値を超える放射性物質が検出されたという風評被害で、悪者のように伝わっていた。何か福島から発信できるニュースはないかと思い撮影を始めた。二本松の東和町は第1原発から50キロ離れているが、原発事故の影響は免れない。一方で、福島の農家がいかに怒りを抱えながら、それでも前に向かって農業を続けたいと思っている。そのことも伝えたいと思い、番組を作りました」と述べた。



『NHKスペシャル メルトダウン File3』のプロデューサーの中村さんは、「あの事故がどうして起きたのかという、



一点に尽きる。普通は現場に入って検証できるが、原発事故は放射能に阻まれてそれができない。あそこで何が起きたのか、手を尽くして分かったことをお伝えしたいというのが動機です」と述べ、更に「専門家の中に、自分たちで検証しなければいけないという気持ちを強く持たれている方々もいて、その専門知識の協力を受けて、番組を作っていくという形を作りました」と番組制作の背景を語った。

■収束の見えない原発事故報道の難しさ

石井さんから「私自身もドキュメンタリーを作ってきたが、番組の結論では、こういう方向があると言いたい。言わないと救いが無いのではないかなと思うが、今回はその辛さがあるのではないか」との質問に、中村さんは「送り手として、廃炉に向かう40年というスパンをどうやって今後記録していけばいいのか、ちょっと先の見えない話です」と述べた。

鈴木さんは「廃炉までどのくらいかかるのか、私たちの世代では、見られない話ですが、少しでも関わっていききたいテーマです」と語り、深谷さんからは「毎日大きな地震がきて、あの緊張感と恐怖感、怖さは口で言っても伝わらない。それでもバトンを次の後輩たちにつなげていかなければいけない」と、お二人からは、福島で地元で放送に携わる、難しい心情が語られた。

■これからの番組制作に向けて



最後に石井さんから「これからどういう番組を作りたいか」との質問に、鈴木さんは「町や村の行く末です。それを見るということは、幸せって何か、生き方って何だろうと、考えていくことにつながるのではないかな。人々に寄り添った形で番組を作っていきたい」と強調した。深谷さんは「遠くにいる方が福島を見た時、私と同じようにはどうも見えていないのではないかな。私は、福島の中にいるのは間違いないので、福島の中から伝える。これからもそういうふうにして作っていきたい」と述べた。

中村さんは「NHKスペシャルで『廃炉への道』という大型シリーズの制作を開始した。正直、廃炉という作業だけ見ると、福島の場合はスタート地点にも立てていないが、何が起きているかということ記録し見続けるということをやりたい」と抱負が述べられた。

第1部の番組上映には54人、第2部の公開セミナーには放送関係者・大学関係者、学生や一般市民など80人が参加した。参加者からは「毎年このようなセミナーを企画し、震災を風花させないことが大事で、制作者の本音が聞ける場も必要だ」「番組制作者の思いにふれて、福島を忘れずに考え続けていきたい」「原発とそれに付随する問題がいかにか複雑かよく理解できた」などの声が寄せられた。

■公開セミナー 第37回名作の舞台裏「ミエルヒ」

3月21日、番組制作スタッフや出演者が自らの番組を振り返る人気公開セミナー「名作の舞台裏」を開催。今回は、2009年に北海道テレビ放送で制作され、地域発ドラマとして非常に高い評価を受けた、HTBスペシャルドラマ『ミエルヒ』を取り上げた。数多くのドラマが地域で制作されるようになった今、地域からテレビを見つめることの可能性を考えた。事前に4000名を超える応募があり、この作品への関心の高さが伺われた。

[登壇者] 安田 顕 (出演) 青木 豪 (脚本)
藤村忠寿 (制作) 嬉野雅道 (企画)
[司 会] 渡辺紘史 (放送人の会)



このドラマの企画について、嬉野氏は「何らかの理由で父親を嫌った息子が家を出奔し10数年帰らず、また何らかの理由で故郷に舞い戻るといった設定だけを考え、脚本家に渡そうと思った。北海道的なもの、観光地的なものを舞台にする気はなかった。江別は、札

幌のすぐ隣の少し寂れた町。江別出身者から、石狩川でウナギを釣っていると聞き、面白いかもしれないと見に行った。河川敷に降りると、一面、冬枯れた葦原。その時に音が変わった気がした。車の音も何の音もしない。そこで僕は非常に気持ちが落ち着いた。振り返ると、葦原が広がって、江別の町がコンクリートの防波堤の壁で見えなくなり、その奥に製紙工場の煙突が何本か出て煙が白く出ていた。完全に疎外されて置いてきぼりになっている空間から世の中を見たような気がして、その時にここかもしれないと思った。」と振り返った。青木氏は「お話頂いた時に、僕はキタキツネとかが出てくる大自然というのは一番苦手なのでと言ったら、寂れた商店街の話です。それは、大好きなので是非とお受けした。」と明かした。また、藤村氏の「根岸希衣さんが演じた役のモデルの方は、ドラマでは子供を亡くした事になっているが、実際は漁をやっていた旦那さんを川に流され、亡くされて、捜索が打ち切りになった翌日から漁師になった。」という話



に、青木氏が「凄く良い話だけど、僕は絶対に使いませんと言っていた。」と返すと、藤村氏が「使いませんと言って、ばんばん使っていますね。子供に変えて。」と突っ込んだ。

この作品のテーマである「父と息子」。泉谷しげるさんの父親役というのは福屋渉プロデューサーの案。藤村氏は「僕はもう少し抑えた静かな感じの人というイメージがあった。」という。しかし、泉谷さんの父親役が見事にはまり、このドラマの成功の要因の一つになった。HTBの人気バラエティ『水曜どうでしょう』から長い付き合いの安田氏についても藤村氏は「イメージになかった。近過ぎてイメージにならない。」と語ると、安田氏は「『なんでお前なんだ』と言われましたよ。」と笑いながら当時を振り返った。藤村氏と安田氏の何でも言い合える関係性が、ラストシーンの安田氏のアップの表情など、いくつもの心に残る演技に繋がった。藤村氏は安田氏に「安田さんはそのままのいいから。」と常に言っていたという。

司会の渡辺氏が「藤村さんはドラマ2作目で、これだけの作品を作るのは凄い。何の無駄もない。ドラマ作りの日が浅い人は、変に凝りたがるが、それが全然ない。」と述べると、安田氏も「監督のセンスが素晴らしいと思う所は、



安田 顕

親子でずうっと道を歩いていくシーン。あのシーンは繰り返しで撮っているのに、正面は一切使わず、背中越しで歩いていく姿だけで押した。これぞセンスだと思った。」と加えた。更に、安田氏の「このドラマは、観光地じゃない通りすぎる町を選んだというのが良い。」との言葉に、嬉野氏が「自分の心に引っかからない町を舞台にしても仕方がない。そこが妙に居心地が良かった事を実感した。だから、このドラマの登場人物は、寂れた町に住んでいても、皆、楽しげなんです。」と加えた。青木氏は「この作品は、嬉野さんに導かれるように書いたので、書き上げるのが早かった。何かに導かれている感がある時は勝手にセリフが出てくる。また、この作品のタイトルは「みえるひ」だと最初に思い付いた。最初は漢字とひらがなで書いたが、福屋さんにこれはカタカナのほうが良いと言われ、カタカナになった。」と振り返った。安田氏はこの作品について「自分の出演作というより、いつの間にか作品として見ている。絵が語っているので、凄く見やすい。寂れた商店街を同級生と2人で歩く、それだけでいい。あとは其々見る人の感性、感じ方だと思うが、僕の場合は、北海道に生まれ、シャッター街に育ったので、自分の感性に凄くはまる作品だった。」と語った。

地域発ドラマという事に、藤村氏は「僕らの中に地域発のドラマを作ろうという気は全くない。必要であれば東京で撮っても良いと思っている。但し、そこに行く時間をかけるのなら、近い所の方が良いので、江別だったり、札幌



藤村 忠寿

だったりする。」更に、「僕は、基本的に1か月前まで本を読まない、カット割りも作らない。但し、ドラマを撮る前にスタッフ全員で役者になり1回全部撮る。時間のかかる作業だが、役者さんが来た時に少しでも対応出来るようにしている。北海道までわざわざ来てくれる役者さんの心意気は相当なもの。だから、地方で作るのは全然不利ではなく、逆に凄く恵まれているとさえ思う。」と語った。

ドラマ作りについて、嬉野氏は「『水曜どうでしょう』と同じモチベーションでドラマにも臨みたい。ドラマだから『どうでしょう』と同じようにやらないようにと言われたら、我々はドラマを作れない。『どうでしょう』の時のアバウトな感じでいられる現場を作る事に腐心している。」と語ると、藤村氏が「ドラマとバラエティは根本違うから、どうやって僕らの持っている力の領域に持っていか、どうしたらドラマ作りを楽しみに出来るかという事ばかり考えている。僕などは、演出家というのは、役者さんの演技を一番近くで見て何か言える立場なので、これはいいね!と、そんな所に楽しみを見つけている。」と加えた。青木氏は「僕は長いドラマを書いたのは初めてだったので、人の話をたくさん聞こうと思った。それに身を浸しているのが楽しかった。藤村さんや嬉野さんのお話を聞いていても『僕らは素人なのでよくわかりません』と言う時は、手探りだから一番面白い事が出来る。僕は舞台を長くやっているが、こうやるとこうなるというのが見えてくると、もうこれはやりたくないと思い、やった事のない事をやろうと思う。やった事がない事をやっている時が一番楽しい。」と語った。

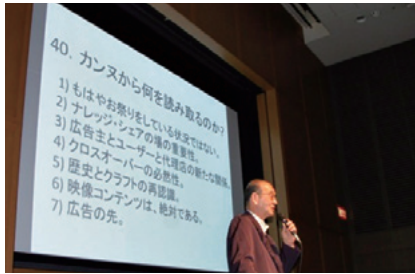
嬉野氏も「僕もこんな楽しい現場はもうないだろうと思うくらい『ミエルヒ』は楽しかった。気心が知れている人達が、其々のモチベーションで現場に臨む。自分がやれない事は誰かにやって貰い、自分がやりたい事だけに邁進出来る環境があったから、あれほど楽しかったのだと思う。」と続け、藤村氏が「皆が、僕が得意な所だけをやらせてくれたから、僕は一番生き生き出来たのだと思う。」と締めくくった。



活気溢れるゲストの話に、地域発ドラマというより、新しいドラマ作りの可能性を感じたセミナーであった。会場からも「素敵な作品をありがとう。」という感謝の言葉がたくさん寄せられた。

■カンヌライオンズ入賞作品上映会

4月19日(土)、情文ホールで「第60回カンヌライオンズ国際クリエイティビティ・フェスティバル入賞作品上映会」を開催した。講師は、フィルム部門の日本代表審査員を務めた鏡明氏にお願いした。鏡氏は、同フェスティバルの審査の様子や世界の広告の最新事情を紹介しながら、グランプリ『愚かな死に方の数々』(メトロ・トレインズ・メルボルン／オーストラリア)をはじめ、入賞作品の中から



から選んだCM 20本を上映。それぞれに詳しい解説を加えた。

この上映会のように、解説付きで世界

の秀作テレビCMをまとめて見ることでできる機会はとても少ないことから、参加者は熱心に耳を傾けていた。参加者からは「1本ずつの丁寧な解説がよかった」、「作品の上映では満足できなかったと思う」、「今後も続けてほしい」などの感想が寄せられた。参加者110名。

また、翌20日(日)から5月11日(日)までの3週間、上映会で紹介されたものと同じ作品を放送ライブラリーの視聴ブースで特別公開した。各作品に鏡氏の解説文を付け、初めて見る人にもわかりやすいようにした。

■「2014 春の人気番組展」

4月17日～5月25日、各放送局の協力を得て「春の人気番組展」を開催。新番組・人気番組のポスターなど恒例の展示に加え、今回新たにBS7社で構成した「BSコーナー」と「テレビ東京開局50周年記念コーナー」を設けた。また、番組制作を直に感じられる台本やセット模型なども好評で、多くの来場者が足を止めた。5月にはGWの家族連れや修学旅行の中高生が目立ち「番組改編期に、全ての局の情報が見られるのは良い」という感想も寄せられた。



■ACC CMフェスティバル入賞作品上映会

3月16日(日)、情文ホールで「第53回ACC CMフェスティバル入賞作品上映会」を開催



した。今回は、ラジオCM部門の審査員を務めた大久保佳昭氏に講師をお願いした。

大久保氏は、まずラジオCM部門の審査の様子を説明。続いてラジオCMの上位入賞作品のうち、グランプリ『まったく同じナレーション』(ワコール)など11本を紹介した。それらを聴き終えた後は参加者に感想を述べてもらうなど、客席の反応を取り込み、ユーモアを交えたやわらかい語り口でラジオCMの魅力を伝えた。

■定時評議員会で平成26・27年度理事及び25年度事業報告、決算を承認

5月21日に第1回事業運営委員会が開催され、小野前副委員長の後任として、堂元委員(NHK副会長)を副委員長に選任した。また、平成25年度事業報告、決算を、原案通り理事会に諮ることなどが了承された。5月26日開催の第1回番組保存委員会では、加藤委員(NHK知財展開センター長)を前期に引き続き副委員長に選任した。また、26年度保存対象番組の選定について了承した。5月29日開催の第1回理事会では、両委員会報告を了承すると共に、平成26・27年度の理事・案について、また25年度事業報告、決算などについて、原案通り、定時評議員会に諮ることが承認され、6月13日開催の定時評議員会で、平成26・27年度理事が決定、25年度事業報告、決算が承認された。新任理事は全日本シーエム放送連盟専務理事の片桐正之氏と、テレビ朝日取締役報道局長の篠塚浩氏。

[平成25年度事業報告]

24年11月に決定した「向こう5年間の事業方針」と当期事業計画に基づき、放送界が実施する公益目的の放送ライブラリーとしての存在感を高めつつ、着実に事業を推進することに注力した。また、民放とNHKの出捐削減に対応するため、基本財産の運用債券の買換え等により利率の向上に努めたほか、仕組債を導入する等、財政基盤の強化を図った。その結果、運用利率は2.1%に向上し、年間の運用収益は、前年度比17.7%増の2億500万円に達した。

[公開番組の充実と利活用の推進] 公開番組数は、テレビは前年同期比400本増の14,759本となった。保存のみに留まっていた阪神大震災関連番組を上映会で初めて公開するなど、放送番組を防災に役立てる取り組みを進めた。

[事業の全国展開] 初めて長崎県立大学情報メディア学科の映像研究の講義で4番組・5本を上映したほか、千葉県市川市の「市川市文学ミュージアム」の水木洋子展に合せ同施設内にサテライト・ライブラリーを設置し、水木洋子脚本の7本のドラマを上映した。

[放送ライブラリー事業の存在感を高める] テレビ放送開始60周年を記念し、人気番組の足跡をたどる「番組上映会・なつかしの番組をもう一度」を、2回に分けて開催した。また、企画展示が大変好評で、来館者数は、120,178人(前年度比36.1%増)となり、放送ライブラリー開始以来の最高記録となった。

■BL・クリエイター支援サービス利用状況

本格運用開始から6月18日までの利用状況。

◇配信番組数：テレビ番組2,746本、ラジオ番組744本

◇利用登録者数：454人(92社)、IPアドレス登録131社

◇視聴実績：テレビ番組 723回、ラジオ番組 97回

今後も本サービスの充実を図り、放送局員への利用を促進していく。利用方法など本サービスについてのお問い合わせは、当センター業務課まで(TEL:045-222-2881)。